

2025年12月の総評に代えて 高橋修宏

火は鳥を鳥は血を乞ふクリスマス

山本先生（東京都）

「クリスマス」をモチーフにしながら、瀆聖的な気配が漂う一句。また、「鳥」が媒介する「火」と「血」のイの母音の活用も効果的だ。もしや、この「鳥」は七面鳥なのかもしれないが…。

神保町が

からだのなかにあったなら
もっとよい羽布団をかぶる

汐見りら（東京都）

「神保町」と言えば、全国的（世界的）に有名な古書の街。古今の知の象徴としての街自体へのフェティッシュな眼差しが、そのまま自らの「からだ」へと及ぶ。さらに、「もっとよい羽布団」という生活感への脱臼も面白い。

除け者にされた獸の毛が詰まり

鍵が奥まで入らない星

常田瑛子（山口県）

具体的に名指しされていないけれど、この「星」は地球でしかないだろう。いま「除け者にされた獸」たちによって、この「星」の鍵は機能不全におちいり壊れかかっている。切実で、批評的な眼差しが光る作品。

風花にふれた指から枝になる

桜庭紀子（和歌山県）

「風花」の「花」が、「枝」を呼び出し、「指」に変容をもたらすのだろうか。シンプルでありながら、変身譚のリアリティが鮮やかな一句。

付箋貼り足す小春日の白昼夢

檜野 美果子（宮城県）

「付箋貼り足す」という身振りが、お茶目で面白い。「小春日」ゆえに「白昼夢」も、どこかほのぼのとした気配なのだろうか。

不夜城の金魚あらゆる顔になる

平松 泥沸（兵庫県）

どこか摂津幸彦の代表句〈露地裏を夜汽車と思ふ金魚かな〉を彷彿とさせる一句。観賞用に人工的に作られた「金魚」を、何ものかの比喩として読むと平俗な印象となってしまうが、「あらゆる顔」の措辞によって、さまざまに想像させる余地を残した。

包丁の寝ても立っている感じ

おかもと（石川県）

なるほど「包丁」は寝かしておいても、どこか不穏とも呼べる存在感は、そのままだ。「寝て」との対比で、「立っている」という擬人的な把握が生きている。

撫でている撫でられている犬

使徒が来るなら私から

森川 紗（福井県）

一行目から二行目への飛躍が、やはりワンダーだ。文字通り、イエスの福音を伝える「使徒」=Apostlesと読むこともできるが、さらに多様な解釈の余白が残されているのではないか。

足裏でオオカミ啼いた、

よるべない

あなたの抄史を売ってきた

岩本遙（東京都）

三行目の「あなた」とは、「オオカミ」のことなのだろうか。そのように受け取ると、「よるべない」、「あなたの抄史」が一気にリアリティを帯びるようだ。かつて、絶滅したニホンオオカミに捧げられた献辞のような気配も漂う。

目の裏の 暗さは似てる 水底に
沈むわたしの 腸の永きに

水底（北海道）

はじまりの「目の裏の」から、「腸の永き」まで、一字アキで記された作品。ゆったりしたリズムに導かれ読み下していくと、具体的な事物は捉えがたいにも拘らず、生々しくダークな気配だけは、たしかに手渡される。「目の裏」から「腸の永き」への身体をめぐる修辞も効いている。